

「舞たうん」百号と ともに生きた日々

一年一昔といわれる技術革新や情報交流の目覚ましい時代にあつて、私は結成以来二十年以上も、「えひめ地域づくり研究会」のメンバーとして愛媛の地域づくりに深くかわり、これまで県内各地をくまなく歩き様々な人と事に出会い、地域の自立と活性化を推進してきました。しかし一方では進んだように見えていた地域づくりも、平成の大合併によつて結成当時以前の姿に押し戻され、なかなか進まぬ世代交代や財政難もあつて、限界集落などの新たな歪を生み混迷のトンネルを抜け出せないでいるようです。

私が地域づくりに目覚めたのは今から二十三年前です。「…のぼつてゆく坂の上

の青い天にもし一朵の白い雲がかがやいているとすれば、そのみを見つめて坂を上つてゆくであらう」。ご存じ司馬遼太郎「坂の上の雲」の一節は、その当時の私の心をよく表現している言葉です。まさに雲をつかむような気持で夕焼けコンサートを下灘駅のプラットホームで、何の当てもなく開いたのです。私の想いは夕日を売り出すことと同時に、内山線開業で本線の座を奪われた予讃線海岸周りが、このままだと消える運命にあるという危機感からでした。無謀にも、たった一人で事を起こしましたが、結果は予想以上の反響を生み、夕日はオンリーワンながら自称日本一、海岸周りも存続して二

兎を手にしたのです。

当時、愛媛の地域づくりをリードしていた、まちづくり総合センターでは、地域情報誌として「舞たうん」を創刊していましたが、時を同じくした私の地域づくりへの取り組みも、上昇気流のような時代背景の追い風を受け、それなりに進捗しているように見えました。しかし、地域住民のまちづくりに対する意識とレベルが上がるにつれて、一種の焦りを感じながら人と情報のネットワークを再構築しなければ生き残れないと思い始めたのです。インターネットとてなかったその当時は活字文化が主流で、情報の拠り所を「舞たうん」という情報誌にかなりの部分で依

若松 進一

えひめ地域づくり研究会
代表運営委員

存していました。

やがて地域づくりの様々なアイディアを駆使して物語を創り自らも語り部となって、地域づくりを目に見える経済効果として高めることができ、地域も自立し始めました。

私の地域づくり二十二年の最初の五年は入門編、次の五年は冒険編、次の五年は実績編、そして最後の七年は個性追求編ではなかったかと述懐するのです。入門編も冒険編も未熟さ故に笑ってすまされる大きな失敗もしました。また実績編では自己満足の境地ながらも、それなりの経済や観光客誘致実績を地域にもたしました。しかし一番最後の個性追求編はまだ意思半ばという感じがですが、私はおおよそ、その目標を三つに置いて活動しています。

まず一つ目は人とのネットワークです。二十数年前の入門時代から考えると私には驚くほどの量と質の人的ネットワークが存在しているのです。県内外を問わず、性差年齢を問わず、実践や学問という世界を問わず、自分の前や後ろに知識と知恵を持った人がいるのです。これは

私の財産であり、金で買うことも価値を測ることも到底できぬ代物なのです。これらの人とこれからも親密な人間関係を保って地域づくりをしたいと思っています。いつの時代も地域づくりの良し悪しは、人の善し悪しで決まります。残念ながらこの三十年、自分たちが生きたり活動したり輝くことに重きを置き過ぎて、次に続く人を育てるという使命を忘れていました。今からは後押しして人材・人財を育てて行きたいものです。

二つ目には情報です。情報には発信情報と受信情報がありますが、これからはいい情報を発信する人のみがいい受信情報を得れると思っています。私はこの四年近く様々な情報を発信し、不特定多数の人と情報の双方向交流ができるようになってきました。ハイテクオリティな情報手段を持たねば最早いい地域づくりはできないのです。これまで知識を入れるために利用してきた「舞たうん」も百号を迎えるにあたり知恵を出すために利用する、ある意味アナログとデジタルがドッキングするような情報誌に育てて行かなければならないと思うのです。

三つ目は生き方の追求です。日本人は百歳まで生きる高齢化の時代を迎えました。しかし愚かな生き方で百歳まで生きてもそれほど価値はないのです。家族とともに、仲間とともに、地域とともに、心豊かに生きるためには、それなりの目標を持って日々進化し、生きていることを実感しなければなりません。三年前自分で造った人間牧場は、これからの人間の生き方を追求する場所なのです。人間牧場では年輪塾ネットを武器に年輪塾を開き、先人の思想や行動に触れながら、日本人が忘れてきた何かを学ぼうとしています。それは、これまで百年の土台の上にこれから百年という新しい空想の家を建て、新しい風おこしをすることなのです。

「舞たうん」百号は、古さからの脱皮と新しさへの羽化かも知れません。まさに温故知新なのです。歴史の中で人々が繰り返してきたように、私もこの機に及び、これまでの「舞たうん」百号とともに野に下り、人間牧場で子どもや地域人と三昧の日々を過ごしながら、地域と地域づくり人の自立に向けた支援ができるなら望外の幸せと思うのです。